

時代の変革者として—世界観をみがきつづけて

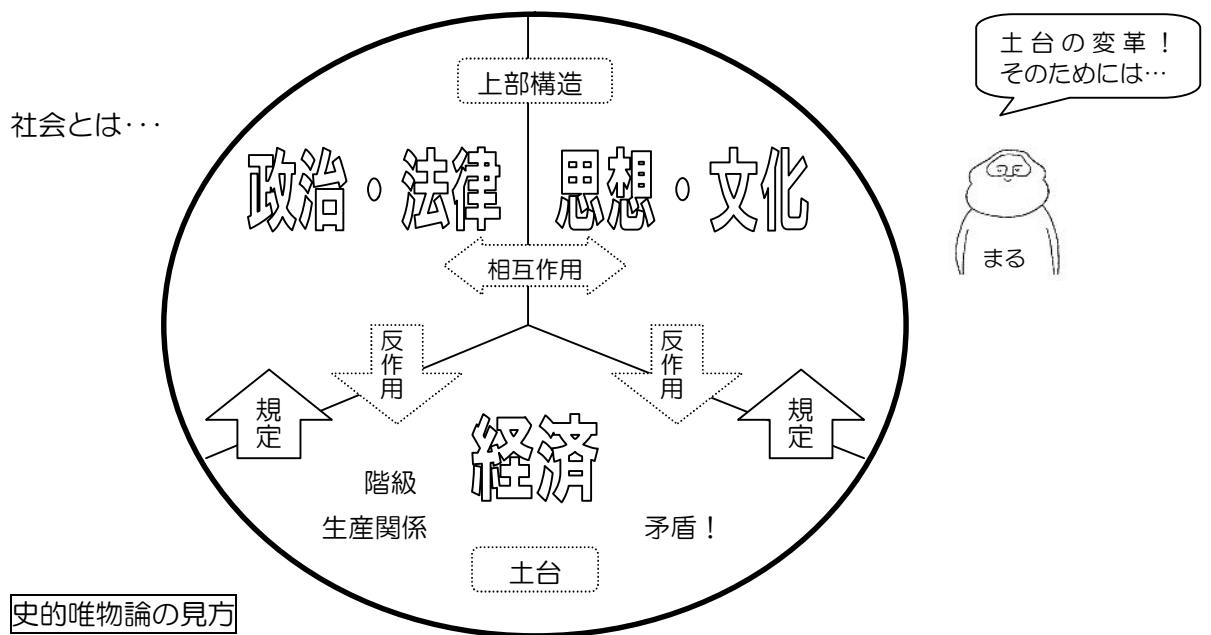
2011. 7. 14

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

《さいごの講義ですね》

一。より自由な社会への変革—史的唯物論の見方とは



1。社会は変化し、発展してきたし、その法則性がある

◇こういう考え方は、ずっと昔からあったわけではない

- *社会は1人ひとりの人間の意志で動いているものだから、法則性などない。
- *あるいは、神が人間社会をつくったという宗教的社会観
- *いまの資本主義社会が人類社会の最高の到達点である、とか
- *英雄・豪傑・偉人たちの活躍。国王や皇帝の業績などを原動力としてみる見方も。

2。社会をみる見方の核心的なポイント

【①社会の土台は、人間の経済生活にある】

◇生産活動がなければ、社会は成り立たない

- *どんな社会でも、衣食住など、人間生活に必要な物資やサービスを生産する活動を抜きにすれば、社会の生活も個人の生活も成り立たない。
- *そのような必要な物資やサービスを、どのように生産しているのか。そのなかで人間がどのような関係をもつのか、そこに、歴史発展の視点をおいた。

【②経済関係の段階的な発展が歴史の時代を区分する】

◇生産力の発展と、生産関係に注目する

*人間が生産活動のなかで、取り結ぶ社会関係（生産関係）は、歴史のなかで大きな変革をくりかえしてきた。生産をめぐるこの社会的関係（生産・分配・交換・消費）の特質こそが、歴史の諸時代を区分してきた。

*その生産関係を変えていく原動力は、生産力の発展。しかし、生産関係が自動的に変化していくわけではない。

◇生産関係をみるポイントは、生産手段の所有関係

*生産手段とは（道具や機械、装置＋天然資源、原料、材料など）

*その生産手段を、だれが、どれだけ持っているかが、ポイント

*人類社会の主な社会発展区分

- ・原始共産制社会→生産手段はみんなで所有
- ・奴隷制社会→主な生産手段は奴隷主がもつ
- ・封建制社会→主な生産手段は封建領主がもつ
- ・資本主義社会→主な生産手段は資本家がもつ



資本主義は永遠じゃないよ！

まる

未来社会は・・・

【③社会を動かす主役は「階級」という人間集団】

◇階級とは

*生産手段の所有の有無、その程度、によって区別される社会的な集団のこと。

*富の分配も、とうぜん区別される。

◇生産力の発展が、生産関係と矛盾するようになる

*その矛盾は、階級間のたたかい（階級闘争）という形であらわれる

*その「たたかいの方法」も社会の発展段階によって異なる

◇そのたたかいを原動力として、社会は変革されていく

二。学問する心—教室をふりかえりつつ

1. 学問の意味

◇「学」は、「まなぶ」「まねぶ」「まねをして習う」こと

◇「問」は「たずねとう」「といただす」こと



*既成の正しいとされている知識を受身になって受け取り、習いおぼえる。

*次に、はたしてそれが正しいかどうかを主体的にみずからあらためて調べた。

*さらに、これまでたしかなものとして伝えられてきている知識によって明らかにされたことにもとづいて、そこからさらに進んだ問いを發すること。

- ・神話をのりこえたギリシャの哲学者たち
- ・天動説を180度転換させたコペルニクスやガリレオ
- ・これまでの人類が生み出した知識を総動員し、封建的世界観・制度を打ち破っていく力にしたフランスの啓蒙思想家たち
- ・ドイツ古典哲学をより発展させる形で登場したマルクス、エンゲルス
- ・マルクスやエンゲルスから百数十年。さらなる進歩が求められている。

◇歴史（先人）に学び、歴史をつくる—学問的態度の必須条件

「自分自身の経験や理性にもとづいて吟味し、前の人といったことでまちがっていると思われることを否定し、新しい、より正しいと思われる主張をすることによって、前の人を考えを発展させていったのです。そして、この態度こそがきわめて大切なものであり、学問的精神とよばれるものです」

（西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書）

◇真理を探究することは、ときに弾圧や迫害を受ける

- * 真実が広まると、自分の権威や権力が脅かされる人たち
- * したがって、階級間の思想闘争が行なわれる。たたかい。
- * 知ること、疑うこと、考えること。そういう場と手段とゆとりを勝ちとる。



◇「知ること」はおもしろい

- * 「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」（アリストテレス）
- * 新しい知識にワクワクする。その知識でまわりをみる新しい目を育てる。

* 学問は、「未知」へつき進もうとする人間の努力そのもの

「既成の知識の一定量を身につけることが学問することなのではない。学問するとは、真実をつかみたいという不断にして無限の努力そのもののことである」

（真下信一「学問する心」『理性とヒューマニズム』所収、

1976年、大月書店）

2. 何のために学問するのか

◇「知識は力なり」（フランシス・ベーコン）

- * ものごとのありようや、そこをつらぬく道理・法則を明らかにすることは、私たちの自由を拡大すること。

◇人間1人ひとりが尊重され、よりよく生きてゆくためにこそ

- * 「人間にとっての善とは」を問うたソクラテスから2400年…

「人間こそ、そこから出発し、そこにいっさいをひきもどすべき唯一の目標であるのだ」（ディドロ）

「われわれが人類のために最も多く働くことのできる地位を選んだとき、重荷もわれわれを屈服させることはできないであろう」（マルクス）

- * 人間は社会的動物（アリストテレスやマルクス）だからこそ、人間そのものや、人間を取りまく世界、世の中のことについて、熱い関心をもたねばならない。

3. 理性的な知性

- ◇知の力は、「よい力」にも、「悪い力」にも使える
- ◇したがって、かんじんなのは、「正しい目的の設定」にある



「知性と理性とはただちに同じものというわけではないはずである。理性とは理想、すなわち真の人間の価値を明らかにし、それへ向けて知性をふくめ一切の人間的是たらきを統括し指導する精神的能力のことである」(真下信一、前掲書)

* 科学者や専門家の社会的責任と倫理—なんのため、誰のためか

「科学に従事する者は、単に科学の世界だけでなく、芸術や歴史や文学や政治にも親しみ、自分を大きな世界全体の中でとらえ、自分がなそうとしていることの意味を絶えず問い直すことが必要」

(池内了『科学の考え方・学び方』岩波ジュニア新書、1996年)

* 経済の論理が優先か、人間の命や自然環境か—エネルギー政策をめぐって

◇ 理性を豊かにするものとしてのヒューマニズム

- * 「人間とは何か」「人間らしさとは何か」を問うてきた哲学者たち
- * ヒューマニズムとは、特定の理論体系をいうのではない。「人間らしさ、人間くささを大切に!」「もっと人間らしく、人間くさく!」という叫び、要求そのもの。

『君のヒューマニズム宣言』(高田求、学習の友社)から

- ① 笑いを大切に—「人間は笑うことのできる唯一の動物」(アリストテレス)
- ② 寛容とユーモアの精神—自分の意見を絶対化しない
- ③ 非人間的なものに対するたたかい—人間の名において、許せないものがある
- ④ 個性の尊重—人間らしさ、人間くささは、色とりどりの形をとって表れる
- ⑤ 文化の尊重—人間の諸能力は文化によって育てられる。より豊かな文化を!
- ⑥ 教養の尊重—学問・知識を身につけることによって養われる、心の豊かさ
- ⑦ 平和を愛するという—人間を押しつぶす最大のものが戦争と暴力

4. 自由に討論できる場が必要—民主主義の保障が学問発展の土台

- ◇ 学派あるいは学問所をつくって討論し、獲得した知識を継承したギリシャ自然哲学
- ◇ 多くの哲学者たちも、本を読んだだけで自分の学説を生み出したわけではなかった
 - * 同じ時代を生きる仲間たちとの、自由な討論の場があった
- ◇ この労働学校の「グループ討論」も、そのひとつの場となったと思う

5. 世界観をみがきつけて—さらなる学習を期待します(私もふくめて)

- ◇ ぜひ、これまでの講義をふりかえりながら、「自分の学習課題」をみつけ、設定し、それを深める努力をしていただきたいと思います。

おつかれさまでした☆